

使徒言行録 第9章10～22節

先週、私たちは、サウロが主イエス・キリストと出会って、すっかり人生が変えられてしまったことを聖書から聴きました。クリスチャンを迫害する者たちの先頭に立っていたサウロがキリスト者の兄弟となり、しかも偉大な伝道者となっていった。サウロはやがて、パウロという名の大伝道者となり、新約聖書の中の数多くの書簡を書き残すほどになっていくのです。いったい何が、サウロをこれほどまでに変えさせたのでしょうか。

サウロが主イエス・キリストと出会ったその時、いったい何が起こっていたのか、実は誰にもわかりませんでした。今日の聖書の箇所少し前、7節にはこう記されています。

「同行していた人たちは、声は聞いても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた」。サウロの周りの人々には、何も見えなかった。そこで何が起こっていたのか、把握できませんでした。周りの人たちは、突然、サウロが悪い夢でも見て、頭が変になってしまったと思ったかもしれません。何が起こっているのか、さっぱり理解できない。しかし、サウロにとっては、まさに人生をまったく変えてしまった出来事。それがイエス・キリストとの出会いでした。

イエス・キリストと出会う前のサウロは、ダマスコでクリスチャンたちを見つけ出してエルサレムへ連行しようとしていました。その道中、突然、天からの光がサウロの周りを照らします。サウロは地に倒れ、声を聞きます。「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」。それは、サウロが迫害していた者からの声でした。そこでサウロは答えます。「主よ、あなたはどなたですか」。サウロのこの姿勢が、彼の方向を決定的に変えました。これまで拒んでいたものに対して、サウロが心を開いたのです。すると、天からの声が続いて聞えました。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる」。もしここで、サウロが天からの声の主を訊ねなかったなら、その後の出来事はおそらく起こらなかったことでしょう。現に、その場にいた他の人々には、声は聞いても、何も見えませんでした。サウロ以外の他の人々は、ここでイエス・キリストに出会わなかったし、人生が変えられることもありませんでした。

同じその現場にしながら、まったく人生を変えられたのはサウロだけでした。そして、私たちの礼拝の中でもまったく同じことが起こります。同じ礼拝に出て、同じ説教を聞きながら、ある人にはまったく変哲のない、毎週繰り返されるだけの礼拝にすぎないのに、特別な出会いがあった人にとっては、たった一度の礼拝によってまったく人生を変えられてしまうほどの出来事が起こるのです。ではいったい、何が違うのでしょうか。サウロは、「主よ、あなたはどなたですか」と尋ねます。主を尋ね求めるその姿勢が、サウロと主イエス・キリストとの出会いを起こさせたのです。私たちには、このようなまことの主との出会いを尋ね求める姿勢があるのでしょうか。そのような姿勢をもって礼拝に臨まなければ、まことの主との出会いは起こらないのです。

さて、主に出会ったサウロは、いったいどうなったのでしょうか。8節にはこんなふう

に記されています。「サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった」。ここに記されているサウロは、キリスト者たちを捕らえて牢に入れていたあの勇ましいサウロの姿とはまったく別人のようでした。サウロは目が見えなくなり、

手を引かれてダマスコに連れて行かれます。一人では何もできない幼な子のように。それまで勇ましくキリスト者を捕まえては牢に入れていたサウロは、主イエス・キリストに出会って、人から手を引かれなければ何もできない者となってしまいます。サウロは、主と出会って無力となってしまったのです。これは、とても大事なことなのです。イエス様に出会うともうすごい力がいただけるのではなく、むしろこのサウロのように、私たちがいかに無力であるかということをお教えされる。私たちは神様の前にあって、力の無い本当の自分をさらけ出すのです。こうして自分の力に頼るのではなく、ただ神の力によって生かされていることを実感する。これが主イエス・キリストと出会った者の生き方なのです。

このように、主との出会いを通してまったく人生が変えられてしまったサウロですが、とてもおもしろいことに、聖書にはどこにもサウロの感情が記されていません。サウロはこれまで自分の信じていた神様のためにと思い、熱心にキリスト者を迫害してきました。自分の信じている神様に対して、イエス・キリストが敵対していると考えていたからです。しかしサウロは主との衝撃的な出会いによって、自分がこれまで信じていたことをすべて覆されます。自分が信じてきた神を自分が迫害し続けてきた。そのショックも大きかったことでしょう。自分がこれまで信じて、これまで行ってきたことはいったい何だったのだろうか。サウロがこれまで信じてきたすべてのことがことごとく崩れてしまった。一生懸命守ってきたサウロの信仰は、ガラガラと音を立てて崩れ去っていきました。その衝撃は、とても言葉では言い表せなかったことでしょう。ところが聖書には、そんなサウロの感情などまったくどこにも記されていません。サウロがいったいどれほど苦しみ、どのような痛みを覚えて、そこから立ち直っていったのか。そんなサウロの内面的な思いは、いっさい語られていないのです。なぜでしょうか。

サウロの上に起こった一連の出来事。サウロの人生がまったく一変してしまっただけの出来事は、サウロ自身が選んで起こした出来事ではなく、イエス・キリストによってサウロの上に起こされた出来事だったのです。すなわちこれはサウロの出来事ではなく、イエス・キリストの出来事、神様の出来事なのです。今日の聖書の箇所では、サウロはただ選ばれた人として出てくるのです。神の選びに関しては、ヨハネによる福音書15章16節で次のように記されています。新約聖書199ページです。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである」。

こうして神様によって選ばれたサウロは、イエス・キリストとの出会いによってすっかり変えられてしまいます。そして今日の聖書の箇所では、そのサウロの世話をするためにアナニアという人が神様から選ばれたことが記されています。アナニアも最初、サウロを信じることができませんでした。13節でアナニアは神様に向かってこう答えています。「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けています」。アナニアは、神様に向かってサウロという人物がいかにふさわしくないかを述べます。ところが、神様はこう答えます。15節、「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わた

しは彼に示そう」。主の名を伝えるために、主が選んだ器。主の名のために苦しむこと。コリントの信徒への手紙二の4章6節から7節に、次のような御言葉があります。新約聖書の329ページです。『闇から光が輝き出よ」と命じられた神は、わたしたちの心の内に輝いて、イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました。ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために』。

私たち自身は宝ではありません。私たちは自分では決して輝くことはできない。しかし、その土の器の内側に、輝く神の栄光を悟る光を持っているのだ。パウロはそう語るのです。

イエス・キリストと出会う前のサウロは、力強く、自信に満ち溢れていました。クリスチャンを捕まえては牢に入れていた以前のサウロは、彼自身、輝きを放つ宝でいたかったのでしょう。自分の力で輝き、自分の光で神様の役に立ちたかった。ところが、イエス・キリストと出会って、サウロは力を失います。目も見えず、誰かに手を引いてもらわなければどこにも行けない。まるで幼な子のようにでした。無力になったサウロは、自分は光ではなく、土の器であることに気付かされます。自分自身で輝くのではなく、土の器はただその中に輝く光を持っているからこそ、価値があるのだ。無力でありながら、神にすべてを委ね、神の力によって生きることのすばらしさをサウロは実感するのです。

私たちは土の器です。イエス・キリストの名を伝えるために、イエス・キリストが選んだ器です。私たちは自分では輝くことはできませんが、この土の器の中に輝く宝を持っているのです。レストランに行ってすばらしい御馳走をいただくとき、その入れ物は料理にふさわしい器が用意されます。良い器、料理にあった器が用いられると、料理はなおいっそう引き立ち、おいしさが増します。器はその料理によって選ばれるのです。私たちは、イエス・キリストが選んだ器です。ふさわしいところにふさわしいようにと、主が選んでくださった。それぞれの働きをなすように、それぞれの内に納められた宝を輝かせるようにと、主が選んでくださった器。主の名を伝えるために、主に選ばれた器なのです。

今日は家族の日礼拝です。みなさんが教会生活を送ることができるように、日ごろから私たちを支えてくださっている家族のみなさんに感謝をささげる日です。今日の聖書の箇所に出てくるアナニアは、サウロに手を置いて祈り、バプテスマを授けるためにだけ、聖書に登場してきます。彼の働きはただそれだけでした。けれども、そのアナニアの働きが、後にパウロという名で聖書にいくつもの書簡を残し、大伝道者として今もその名が語り継がれる人物として、サウロが生まれ変わるために欠かすことのできない働きをしたのです。アナニアがいなければ、大伝道者パウロは生まれなかったかもしれない。そのような大切な役目を担ったのが、アナニアでした。主イエス・キリストと出会ってすべてを変えられたサウロをサポートするためだけに、神様に言われたとおりにその働きをなしたアナニア。けれども、その働きがなければ、サウロは大伝道者パウロにはなることができなかったことでしょう。私たちの役割は、アナニアのようなものかもしれません。私たちも、日ごろから私たちの教会生活、信仰生活を支えてくださっている私たちの家族を覚えて、その家族が主イエス・キリストと出会うためのサポート役、アナニアのような働きをさせていただきたい。そのために、それぞれの家族を覚えて祈り続けていきたいと思います。

お祈りしましょう。